

雨音による心安らぐ雰囲気構築

インスタレーションによる空間に対する音のアプローチ

Constructing a Calming Atmosphere Through the Sound of Rain - An Acoustic Approach to Space through Installation

張 瑞麟

ZHANG RUILIN

東京藝術大学 美術研究科

Abstract : This paper focuses on the calming atmosphere created by the physical phenomenon of raindrops and examines how the environment contributes to evoking this sense of tranquility. It explores how the experience of listening to rain has evolved over time and how it reflects different cultural backgrounds.

Key Word : Sound of Rain, Calming Atmosphere, Installation

1. はじめに

本研究は、「雨」という気象現象を中心に、雨の物理現象を用いたインスタレーションの制作を通じて、人々の雨の日の情緒を喚起する環境を構築し、雨に対する美的関心を刺激することを目的とする。そこで本稿では雨音という物理現象がもたらす心安らぐ雰囲気に焦点を当て、環境がこの心の安らぎという情緒の誘発にどのように寄与するのかを考察する。また、雨音の体験の変遷とそれが反映する文化的背景を比較し、インスタレーションがどのように心安らぐ雰囲気を作り出すかという仮説を提示し、制作および展示を通じてその仮説を検証する。

2. 背景

2.1. 環境・雰囲気・情緒

本研究では、環境・雰囲気 (Ambience)・情緒を相互に関連する概念として捉える。まず、環境とは物理現象や空間配置、感覚刺激を含む客観的な条件を指す。次に、雰囲気とは、環境と人間の知覚が相互に作用することで形成される感性的な体験を指し、感情的・心理的な影響を及ぼす。Böhme は「雰囲気美学 (Atmosphärische Ästhetik)」を提唱し、雰囲気が主体と環境との感覚的な相互作用によって生じるものであると主張した。

東アジアでは、「雰囲気」という概念は伝統的に「気」として捉えられ、日本や中国の文化において、「雰囲気」の「気」は、大気の流れにとどまらず、環境や人々の統合的な知覚を象徴するものとされる [1]。この概念は、Schmitz の「準物体 (Halbding)」とも共通する部分を持つ。「準物体」は、風や光、音のように具体的な形を持たないが、人間の情緒や知覚に強く影響を与える存在である [2]。

したがって、雨音は単なる現象ではなく、「準物体」として雰囲気を形成し、情緒を誘発する重要な要素である。本研究では、インスタレーションを通じて、この雨音の持つ雰囲気形成の特性を活用し、多様な空間において人々が雨音のもたらす安らぎ情緒を体験できるようにすることを目指す。

2.2. 雨音と安らぐ情緒

日本および中国の文化において、雨音を聴くという体験は、長い間「静寂」や「沈黙思考」と深く結びつき、これらの情緒は、心安らぐ雰囲気の形成にも寄与してきた。例えば、日本文学では徳富蘆花の『自然と人生』において、時雨が突如降り、地面に落ちる雨粒の音、屋根や草木に当たる雨粒の音、

Furthermore, the study presents a hypothesis on how an installation can generate a soothing atmosphere. Through the process of creation and exhibition, this hypothesis is tested and analyzed to better understand the relationship between sound, space, and emotional perception.

雨音の動きと断続性、雨上がりの静寂が描写されている。このような描写は、人々は雨音の微細な変化に注意を向け、自然と人間の感情が相互に影響し合うことを示唆している。一方、中国では「雨が芭蕉を打つ」という表現が詩文に多用され、雨音が「惚れ」や「哀しい」と結びついている。このように、雨音は文化的な象徴として、伝統的に人間の情緒と密接に関係している。

現代都市では、雨音を聴く体験は窓際や傘下などの環境へと変化したが、「落ち着き」や「静寂さ」といった情緒的な特性は依然として保たれている。また、デジタル時代においては、YouTube や Spotify などで「雨音のホワイトノイズ」が睡眠や集中のために利用されるなど、雨音の体験が新たな形で拡張されている。

3. インスタレーションの介入

3.1. 自然に対する人間の3つの関係

このような背景を踏まえ、本研究ではインスタレーションを用いて雨音体験を再構築し、雨音の無い無機質な空間に音を通じた心安らぐ雰囲気を創出する可能性を探る。Martin Seel の「自然に対する人間の3つの関係」に基づき、雨音を直感的に体験し、その美しさを感じる「観照的意識 (Sensory Contemplation)」を探求する。そして「照応的意識 (Corresponsive Level)」、つまり文化的・歴史的な象徴要素を加え、体験者が雨音と自身の記憶や感情を結びつける。この2つの状態において、雨音の表現と環境的な雰囲気の形成は、体験者を「想像的意識 (Imaginative Stage)」に導き、雨音を通じて、都市空間や現代社会における新たな美的表現を探求する。本研究では、この3つの意識を踏まえたインスタレーションを制作し、その効果を検証する [3]。

3.2. 先行表現

雨音をテーマとするインスタレーション作品は既にいくつが存在する。たとえば、共栄デザインの「re-rain」は、雨傘とスピーカーを組み合わせた作品である。また、FAR-MS の「Shapes of Rain Installation」や Matthijs la Roi の「Rain Amplifier」は、屋外で雨音を活用した音響体験を創出する。

先行例と比較して、本研究は雨音の空間的な知覚体験を共有するが、音の生成原理、空間演出、視覚との関係性で異なるアプローチを取っている。聴覚と情緒の共鳴を重視し、「心安らぐ雰囲気」を核とした体験設計を目指し、先行例との差異を実践的に探求している。

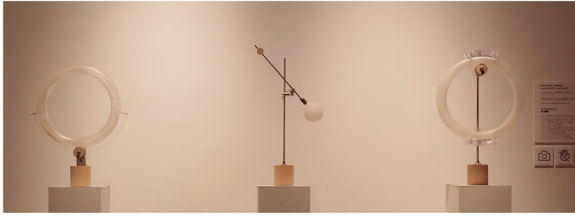


図1 「レインリング・レイニング」展示の様子



図2 内部の枝と球体

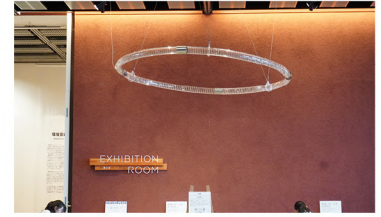


図3 「Ame Gumo」展示の様子

3.3. 「レインリング・レイニング」

本作品は、約300mm×300mm×220mmのインスタレーション3台で構成されており、雨音の物理特性を活かし、観照的な思索を誘発することを目的としている。本作品はアフリカの伝統楽器から着想を得ており、内部にはDNA型に配置された枝と様々な球体が組み込まれている。球体は3Dプリントによる球状・円状の軌道内を重力に従って移動し、竹・米・黒豆・アクリルなど、枝や球体の異なる素材が互いに当たることによって、「ザーザー」「ポツポツ」といったランダムな衝突音を生み出す。この作品は、Seelの「観照的意識」を体現する試みであり、音そのものを純粋な美的対象として提示し、体験者が直接的に音環境に没入することを促す。

さらに、使う素材も「雨」の趣旨に沿ったものである。例えば、竹の枝は竹林の中で雨音を聴く体験を連想させ、米粒や黒豆は農耕文化に根付いた象徴である。これらの要素を通じて、体験者が「雨の音」と文化的背景を結びつけることで、「照応的意識」へと移行することを意図している。

本作品は2024年9月、東京藝術大学の芸術祭“0”展に出品した。装置は高さ1mの柱型展示台に横並びに設置されたが、透明なアクリルと金属と木材の素材が視覚と聴覚の両面で静寂さを感じさせる(図1)。賑やかな展示空間の中でもこの作品は静かに際立ち、多くの来場者が足を止めて聴き入り、その造形と音の表現力の豊かさを示すことができた。一方で、今回の研究テーマである「心安らぐ雰囲気形成」という観点から見ると、一つの空間に並列に配置による音場の単調さや、異なる雨音が重なりすぎることによって体験の誘導が難しくなる問題が発生した。そのため、「照応的意識」への移行が十分に機能せず、体験者の感情と音との共鳴を深める点に課題を残した。つまり、空間に対する音の配慮が「照応的意識」を誘発するための要素として重要であることが示唆された。

3.4. 「Ame Gumo」

前作の反省を踏まえ、本作品「Ame Gumo」では、音の空間感覚を強化するとともに、体験者を身体的に誘導するデザインとなっている。作品は4つの部分で構成された中空のアクリルチューブで直径2700mmの円環を形成し、金属ワイヤーで天井から吊るす構造を採用した。円環の傾斜角度は中央のモーターで制御され、ワイヤーの長さを調整することで軌道の傾きを変化させる仕組みとなっている(図2)。

円環内には軽量のアクリル球体が配置され、重力に従って移動する際に竹の枝と接触し、転がるような「サラサラ」という音を生み出しながら、時折竹の枝にぶつかって跳ね返り、葉についた雨粒のようなポツポツ音を立て、アナログ素材ならではのランダム性のある音空間を作り出している。さらに、音源の位置にも工夫が施された。本作品では、体験者の頭上(天井付近)に配置することで、音の方向性を明確にしつつ、拡散範囲を広げることを狙った。これは、頭の近くで音が移動すると、左右の耳に届く音の時間差や強さの変化が大きく

なり、方向感が強調されるためである[4]。こうした音の特性を考慮し、視覚よりも先に聴覚によって雨音の移動を知覚させ、没入感のある音響空間を創出することを試みた。そのため、静かな空間に響く雨音は、その音の出どころを辿るようにして、人々の足は自然と作品のもとへと導いた。まるで音そのものが、作品に近づく前からその存在を感じさせ、聴くことで出会わせる静かな呼びかけとなっていたのである。

また、「照応的意識」を誘発するために、装置の下に椅子やテーブルを配置し、座るといった身体的行為を通じて「休息」や「静けさ」といった伝統的な雨音体験の記憶を呼び起こす試みがなされた。これは、体験者の身体的な誘導が、雨の記憶を自然に呼び起こし、作品における音との感情的な共鳴を生み出す可能性を示すものである。

本作品は2024年12月、茨城県水戸市民センターにて開催された環境芸術学会特別展「繋がり発見」に出品された。展示期間中、空間に流れる雨音のもとで学生が読書をしたり、来場者がリラックスして会話を楽しんだりする光景が見られた。このような空間の変容は、雨音が持つ「心安らぐ雰囲気」を創出したと考えている(図3)。展後、「下の階で聞こえていたサラ音と、上に来て実際の装置を見たら想像と違って面白かった」「現実のホワイトノイズのようだ」という感想が寄せられる一方、「激しめの雨音に感じられ、作品の挙動はもう少し安定したほうがよい」という貴重な意見も得られた。

二つの制作物は、「準物体」としての雨音の特性を具現化したものである。すなわち、視覚的には明確に把握できないが、身体の内知に強く影響を及ぼす「準物体」としての音を空間内に配置することで、環境と身体との情緒的な結びつきを深めているのである。

4. 今後の展開

筆者はこれまでに、上記以外にも雨にまつわる作品を多く制作してきた。今後の研究では、雨にまつわる情緒の多様性を探究し、インスタレーションを通じた研究を継続的に推進する。これまでの研究で試みた「観照的意識」と「照応的意識」の実践を踏まえ、「想像的意識」へと展開することを示唆している。これにより、人々が都市空間において雨景の想像力をさらに豊かに刺激し、日常的な環境のなかで雨を美的対象として再発見する契機となることを期待する。

参考文献

- [1] Gernot Böhme 著、梶谷真司・齊藤渉・野村文宏編訳『雰囲気美学 新しい現象学の挑戦』晃洋書房、2006。
- [2] Diaconu Madalina 著『Aesthetics of Weather』Bloomsbury Academic、2024。
- [3] Martin Seel 著、加藤泰史・平山敬二監訳『自然美学』法政大学出版局、2013。
- [4] 岩谷幸雄、頭部伝達関数による音像定位 個人化へ向けたデータ群と課題、日本音響学会誌 73 巻 3 号、2017。